

平成23年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	管23K11	氏名	谷川 明
研究主題 —副主題—	小学校作文指導における支援の在り方 —評価との関連を考えて—		
所属校	多摩市立多摩第二小学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>通常の学級に在籍する児童の、およそ6%が特別な支援を必要としていると言われる。そうした支援が必要な児童は、特に国語の学習で「何をしてもよいか分からない」と訴えることが多い。これは国語科のもつ「あいまいさ」に原因がある。つまり、児童が「どうすればよいのか」見通しがもちにくい教科であり、それが児童の「何をしてもよいか分からない」という言葉に繋がってくる。</p> <p>最近では、特別な支援に関し様々な小学校での実践研究がなされており、多くの具体的な提案がなされている。</p> <p>しかし、国語科は評価が曖昧になりやすく、指導と評価の一体化が難しい教科でもある。そのため、指導と評価の一体化を目指すために、また、支援を要する児童への観点からも「指導と支援と評価の一体化」が図られた授業が行われることで、児童の理解はより深まり、付けたい力を付けられることが考えられる。</p> <p>本研究では、小学校国語科における作文指導で「指導と支援と評価の一体化」を目指すために、「ルーブリック」を用いた支援について考察する。それにより、評価に適した支援を取り入れることで、配慮を要する児童の評価が高められることを検証する。</p>
II 研究の方法	<ol style="list-style-type: none"> ① 文献・論文の講読、実践の省察、先行実践の理解 ② 「支援なしの作文」と「支援ありの作文」の比較・検討（事前調査） ③ ②から、児童の実態と担任の支援・評価の内容を考察 ④ ③を元にした指導案作成、作文実践（本調査） ⑤ 本調査での支援の有効性の検討、事前調査時の作文との比較 ⑥ 考察・まとめ <p>本研究では、児童が体験を振り返り感想をまとめることが、作文の基礎となると考え、「生活感想文」の支援方法を検討する。対象は小学校高学年である。</p> <p>②は、児童の作文を書く力を検証するために行う。まず支援なしで実力を調査した後、支援を行い、児童の作文の変化を考察する（③）。さらに、③で得られた児童の実態、支援や評価から「ルーブリック」を作成し、児童の作文の評価に変化が見られるかを検証する（④）。ここでは、「指導内容」「評価規準・基準」と共に、評価のための「支援内容」も一体化したものをルーブリックとする。事前調査で有効だった支援から、作文を評価する観点を決め「評価から逆向きに」授業設計を行う。ルーブリックに基づいて支援を行い、「指導と支援と評価の一体化」について検証する。</p>

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>事前調査時に担任が行った支援で、有効だった手立ては、①書き出し、②言語事項、③心情描写、④まとめ、⑤段落、⑥焦点化、⑦構成である。これらを評価規準として設定し、ABCの3段階で評価基準を定めた。その評価基準に沿い、支援内容も考察した。ルーブリックには、指導内容、支援内容、評価規準・基準を記載し、児童の理解に応じて、様々な支援が行えるようにした。</p> <p>ワークシートは「焦点化」と「構成」を考える支援として用意した。焦点化した内容に関する事柄を付箋紙に書き、作文を書く順番に付箋紙を貼り付ける。付箋紙を取捨選択したり、貼り替えたりして、効果的な構成を考えられる。</p> <p>これらの結果、事前調査時に評価の低かった抽出児について、変化が見られた。その児童の弱い部分の評価を高めるための、具体的な支援が行われた結果による。作文を書く前の、書く目的を確認する段階から、具体的な支援を行うことができた。これは、ルーブリックを作成したことによる効果である。あらかじめ考えられていた支援を行うことで、指導が活性化し、事前調査時にできなかった部分への支援を行うことが、評価を伸ばすことに繋がった。</p> <p>抽出児以外でも、「焦点化」のAが2%→16%、Bが19%→50%、Cが79%→34%へ、「構成」のAが3%→16%、Bが18%→56%、Cが79%→28%へと変化した。焦点化を行ったことで、すべての出来事を書かず、自分が書きたい部分を明確にしたことで、内容の絞り込みを行うことができた。構成も工夫され、他の評価にも影響を与えた。</p> <p>担任は個別支援も行った。例えば言語事項で、すべて書き終わる前に個別でチェックしたり、近くで読み合っ直させたりした。構成に悩む児童には、キーワードを書いたり、付箋を貼り替えたり、書き出しをアドバイスしたりすることにより、作文の内容を向上させることに繋がった。全体の声かけだけでなく、個が困っていることを全体に投げかけて、また個に返すことも行われ、それが全体の作文の出来を上げたと考えられる。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>評価規準・評価基準を考え、それぞれに具体的な支援を考えることは、児童の実態を考慮して、作文の内容を充実させることに繋がる。事前調査で得られた有効な支援は、特定の力が弱い児童にとって、その部分を伸ばす手立てとなった。また、指導と支援と評価を一体化したルーブリックにより、児童の評価を高めることができた。これは、どのような支援を与えるかを含め、授業の構成を考える手立てとして用いることができる。つまり、評価と支援を一体化させることで、指導が活性化し充実した内容となった。体系化した指導・支援・評価を行うことの重要性を示している。</p>